

—— 現場からの報告 ——

劇詩「人虎記」を観て

瓜生 鐵二

音楽担当の先生から「華音（ホウイン）」春のコンサート招待券二枚を戴いたので、三月十六日（日）、新宿文化センターに聴きに行った。「華音」とは、日本に留学している中国の音楽関係者を中心に結成された中国歌舞団のことである。当日の構成は

《第一部》 中国の民族音楽

《第二部》 中国古伝説 劇詩「人虎記」

《第三部》 ジョイントコンサート

中国楽器の為の協奏曲「漢土幻想」

の三部からなっていた。中でも私が一番強い関心を抱いていたのは《第二部》であった。私は先きに一月から三月初旬までの間、中島敦の「名人伝」と「山月記」を高二の現代文教材として授業を行ない、それらを範囲とする学年末試験を終えたばかりであった。それだけに、同封された案内書きの中に、

「人虎記」は国訳漢文大成第十二巻にある「晉唐小説」に収める「唐人説会」によったもので、李景亮撰ということになっている。

「産を破り心を狂わせて」まで詩業に熱中した不幸な詩人の李徴が、虎と化してもなお自分の詩業の一部を後代に伝えないでは、「死んでも死に切れない」という物語……どうして詩人が虎に化したか……!?

という解説文を見出した時には、李景亮撰の「人虎伝」と中島敦の「山月記」とのストーリーの違いがどのように克服されているかといった点での興味が強かった。原案 原田力。台本・

演出 泊正則。作曲 劉錦程といったスタッフの作品解釈のあり方に対する興味と関心でもあった。

しかし、実際の場面では中島敦の「山月記」のストーリーを忠実に追う形で劇は進行していった。舞台中央に唐草模様の大風呂敷を思わせる図柄で虎が描かれ、上手に地の文の「語り手」を動める俳優の大神信が座していた。バックグラウンドミュージックを担当する「華音」の団員も後方周囲に並んでいた。やがて李徴を動める俳優の津野哲郎が登場し、旧友哀惨の前で、己れが虎になった経過や原因が語られる。その際効果を上げたのは背後のスクリーンに大写しされた影絵の虎である。つまりこの劇は、「語り手」と「俳優」と「音楽」と「照明」によるアンサンブルとして構成演出されていたのである。中でもとりわけ「語り」の重要さを思い知らされた。

私達は日頃の授業で作中の人物になり代った気持ちで、作品を朗読しているだろうか。虎と化した李徴の気持ちをどれだけ悲痛の思いで受け止め、絶叫の声として表出しているであろうか。「人虎伝」と「山月記」との差異点を縷々説明することよりも、もっと大切なことを忘れてはいないだろうか。しっかりと「朗読」や「語り」が出来れば、必ず確かな理解力が育ってくるのではないか。現代っ子の音楽に関する知識や技能は非常に優れたものがある。「音楽」「照明」「ナレーター」「配役」……を決めて、「山月記」を解釈する教材から離れて、新たな創造を生む教材として取り扱えないものだろうか。同行した教員もこの考えに同感してくれたのだが……。

（早稲田実業学校）